

# JSHCT Letter

No.9

The Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation

日本造血細胞移植学会

March 2002

発刊発行：日本造血細胞移植学会 〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町65番地 名古屋大学医学部第一内科内 TEL (052) 744-2146 FAX (052) 744-2161  
発行：齋藤 英彦 編集責任：日本造血細胞移植学会ニューズレター編集委員会 印刷：株式会社セントラルコンベンションサービス 年2回発行：2002年3月

## 第24回 日本造血細胞移植学会総会を終えて

北海道大学大学院医学研究科癌制御医学講座(血液内科)  
会長 今村 雅寛

第24回日本造血細胞移植学会総会は平成13年12月20日(木)~21日(金)の2日間にわたり、札幌市北海道厚生年金会館と札幌市教育文化会館において開催され、国外からの招待講演者11名、国内からの参加者約2,000を迎え盛会のうちに終了しました。

今回の学会のテーマは「英知の結晶」で、これまでに蓄積されてきた造血細胞移植に関する基礎的、臨床的成果を背景に、英知を結集して雪の結晶ならぬ「英知の結晶」へと具現化することでした。造血細胞移植の分野は治療学として着実に発展してきていることが本学会で確認され、将来展望は明るいものと思われまふ。一般演題365題を含む447題の発表があり、一般演題の特徴は、ミトランスプラントと無菌看護の効率化に関する演題の増加です。このほかにも、非寛解期移植、HLA不一致ドナーからの移植、稀な疾患に対する移植、ドナーリンパ球輸注、臍帯血移植の増加も目立ちました。

造血細胞移植は免疫療法としての側面を内包しており、その効果が確認されつつあります。それをさらに細胞療法として発展させるにはどうすべきか、特異的な抗腫瘍免疫を誘導しつつ移植片対宿主病を抑制し、免疫寛容を誘導するにはどうすべきかがシンポジウムや教育講演で触られました。特に、最近注目されているミトランスプラント、混合キメラリズムの意義、移植片対宿主病と移植片対白血病効果の分離、ドナーリンパ球輸注の応用、免疫寛容誘導機構については学会のひとつの目玉として、国内外の著名な学者による発表がなされ、満足できたものと考えます。

再生医学も骨髄移植をはじめとする造血細胞移植と密接な関係にあり、それに関する特別講演や招待講演も生まれ、近い将来必ずや現実化するものと期待されます。造血機構の研究も進歩が目覚しく、造血細胞移植を語る時に避けて通ることのできない重要な課題と思われ、さらなる研究の進展が望まれます。

造血細胞移植がチーム医療であり、医師のほかにも多数の看護婦やコメディカルの参加がなされる点に特徴を有する学会であります。年々その傾向が強くなりつつあります。各会場でそれらの参加者による熱心な討論が見られました。この形式が今後もそのまま引き継がれ、さらにこの学会が発展することで、細胞療法としての完成を見、多くの患者さんに治癒が望める医療を供給できればと願っております。

# 日本造血細胞移植学会からのお知らせ

第24回日本造血細胞移植学会総会におきまして理事会、評議委員会で討議がなされ、平成13年度12月21日の総会において承認されました事項につきお知らせいたします。

- 平成14年度の会長は大阪府立母子保健総合医療センター小児内科の河敬世先生で、総会は平成14年10月24日(木)、25日(金)に大阪国際会議場で開催される予定です。
- 平成15年度の会長には東海大学小児科の加藤俊一先生が選出されました。会期、会場は未定です。
- 平成13年度で任期満了となる理事、池田康夫、土肥博雄、原田実根、平岡諦、齋藤英彦、(以上、内科系)、加藤俊一、松山孝治(以上、小児科系)、塩原信太郎(その他臨床系)尾上裕子(コメディカル)(敬称略)の改選がおこなわれ、以下の9名が理事に選任されました。任期は平成14年4月1日から平成18年3月31日までです。
 

【新理事】(敬称略)

内科系:池田康夫(慶義塾大学)、今村雅寛(北海道大学)、谷本光音(岡山大学)、原田実根(九州大学)

小児科系:加藤俊一(東海大学)、小島勢二(名古屋大学)、土田昌宏(茨城県立こども病院)

その他臨床系:塩原信太郎(金沢大学)

コメディカル:尾上裕子(東京大学医科学研究所)
- 評議員選任委員会が平成13年11月14日に神戸ポートピアホテルにて開催されました。中畑龍俊(委員長)、岡本真一郎、小島勢二、権藤久司、星順隆、麦島秀雄の各委員出席のもと、理事評議員選任規約(細則)及びこれまでの申し合わせ事項に基づき選考がおこなわれました。今回は24名の応募があり、内科系10名、小児科系4名の計14名が選任された旨、理事会・評議員会にて報告があり、総会において承認されました。以下の14名が平成14年4月1日より評議員となります。
 

【平成14年度新評議員】(敬称略)

内科系:鶴池直邦(国立九州がんセンター)、恵美宣彦(名古屋大学)、甲斐俊朗(兵庫医大)、金森平和(横浜市立大学)、鳥野隆博(大阪府立成人病センター)、幸田久平(旭川赤十字病院)、浜口元洋(国立名古屋病院)、日野雅之(大阪市立大学)、古川達雄(新潟大学)、村山 徹(兵庫県立成人病センター)

小児科系:熊谷昌明(国立小児病院)、小池健一(信州大学)、辻浩一郎(東大医科研)、渡辺 力(徳島大学)

その他臨床系:なし

コメディカル:なし
- 平成14年3月31日にて任期満了となる現監事の小島勢二(名古屋大学)に替わり、新監事として土屋滋(東北大学)が推薦され、承認されました。任期は平成14年4月1日より平成16年3月31日までです。現監事の坂巻壽の任期は平成15年3月31日までです。
- 全国集計データ管理委員会より平成13年度全国調査報告書を送付したが、一部訂正箇所に対するシールを送付する旨、報告があり、このニュースレターに同封いたしました。
- ガイドライン委員会より、「移植の適応」に関するガイドラインが完成間近であり、平成14年2月に発送予定であることが報告されました。
- ニュースレター、ホームページの充実と全国集計データ欧文紙への投稿等をおこない活動をさらに活発にする目的で編集委員会が設置されたとの報告がありました(内規を3ページに掲載しています)。
- PBSCT小委員会より、同種末梢血幹細胞移植ドナーフォローアップ事業に関し、平成13年11月末現在、1139名の登録があり、短期調査票の回収率が約80%であることが報告されました。また、レシピエント調査に関する契約が始まったことが報告されました。
- 学会としてのより質の高い臨床研究や前方向視研究に関する取り組みを検討していた前方視研究ワーキンググループが「臨床研究委員会」として発足することとなりました。内規の詳細は委員会で検討することとなりました。

11.新しい委員会の発足や各委員会の委員の任期満了に伴い、各委員会の委員は次のようになりました。新しく設置された委員会の委員は平成13年12月21日より任命されました。既存の委員会に関しましては現在の委員の任期は平成14年3月31日までです。平成14年4月1日より新しい委員により構成されます。

【全国集計データ管理委員会】(平成14年4月1日 - 平成16年3月31日)

委員長(会長):河 敬世

小児科領域委員:今泉益栄、花田良二、土田昌宏、東 英一、麦島秀雄

内科領域委員:笠井正晴、高橋聡、谷本光音、平岡 諦、森島泰雄

【ガイドライン委員会】(平成14年4月1日 - 平成16年3月31日)

秋山祐一、岡本真一郎、小島勢二、島崎千尋、田野崎隆二、前川 平、森下剛久、矢部普正

【理事評議員選任委員会】(平成14年4月1日 - 平成15年3月31日)

委員長(前年度会長):今村雅寛

委 員:小林良二、権藤久司、中尾眞二、星 順隆、松山孝治

【臨床研究委員会】(平成13年12月21日 - 平成16年3月31日)

浅野茂隆、池田康夫、今村雅寛、加藤俊一、河敬世、小寺良尚、高上洋一、土肥博雄、中畑龍俊、浜島信之、原田実根、森島泰雄

【編集委員会】(平成13年12月21日 - 平成16年3月31日)

委員長:谷本光音

委 員:岡本隆弘、佐尾浩、品川克至、田中淳司、谷口修一、前川平、宮村耕一、矢部普正、山本一仁

【PBSCT小委員会】

委員長:小寺良尚

委 員:浅野茂隆、池田康夫、加藤俊一、谷本光音、土肥博雄、中畑龍俊、浜島信之、原田実根、森島泰雄

判定委員:塩原信太郎、松山孝治

12.事務局より学会の平成12年度の決算報告及び平成14年度の予算案が示され、承認されました(決算報告と予算案を5ページに掲載しています)。

13.事務局より同種末梢血幹細胞移植調査特別事業に関し、平成12年度の決算報告と平成13年度の予算案が示され、承認されました(決算報告と予算案は6ページに掲載しています)。

以上、敬称略

## 日本造血細胞移植学会編集委員会内規

### 第1条(目的)

日本造血細胞移植学会編集委員会(以下編集委員会という。)は、会員の造血細胞移植医療等の向上や会員間の情報交換および、広く社会に向けて日本造血細胞移植学会(以下学会という。)の活動等を発表、紹介し、学会の向上に寄与することを目的として以下の広報事業を行う。

### 第2条(事業)

ニューズレター等による学会活動の報告事業

ホームページによる学会活動の広報事業

専門誌への投稿事業

その他会員が必要とする広報事業

### 第3条(編集委員および編集委員長)

編集委員(以下委員という)は、理事会において各地域を考慮して選出し、評議員会、総会の承認により決定する。おおむね10名程度とする。編集委員長(以下委員長)は委員会の互選による。

### 第4条(委員の任期)

委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

### 第5条(編集会議)

編集委員会は定期的に編集会議を開催、もしくは電子メール等にて連絡を図り、事業の円滑な遂行をはかる。

### 第6条(内規の発効)

本内規は平成13年12月21日をもって発効する。

## 施設紹介

今回は、国内で非血縁移植の経験が豊富な病院の一つである名鉄病院血液内科の飯田浩充先生に、ご勤務先を紹介していただきます。今後、前号からスタートしました留学教室紹介と併せて企画していきますので楽しみにしてください。

### 名鉄病院 骨髄移植センター

岐阜へと向かう列車の窓から車外に目を移すと、線路に沿うように造られた、一面ガラス張りの通路が眺められた。イルカやカモメが踊る黄色い壁の前で、点滴スタンドを引きながら、小さな子供の側に立つ、マスクをした男性をみつけた。

「あれは さんじゃないかな?」

名鉄病院は、その名の通り、名古屋に本社をおく私鉄、名古屋鉄道の健康保険組合が母体となって設立された病院で、総病床数は400床余りである。建物の横には名鉄やJRの線路が走っており、名鉄栄生(さこう)駅のホームから連絡通路で直接つながっている。

骨髄移植センターは、この1号館の4階にある。『骨髄移植センター』と書かれた扉を開けた先はダウンフローによる無菌ユニットとなっており、この中に個室10床とナースステーションがある。ユニット内に入る際には、ウェルパスによる手指の消毒とスリッパの履き替えを行うが、白衣はそのままである。患者家族も同様に入室できる。看護スタッフは婦長を含め現在9名で、3交代勤務を行っている。造血幹細胞移植患者は移植前の2週間と、移植後の2ヶ月程度をこの病棟で、それ以外の時期は3階の血液神経混合格病棟で過ごしている。

現在の骨髄移植センターは、平成5年に開設されたものである。これまでに200例を超える造血幹細胞移植を行い、最近では年30例強のペースで移植を行っている。非血縁者間の骨髄移植は130例を越え、日本でも非血縁移植の経験が豊富な病院の一つである。血液内科の医師は現在、佐尾部長以下4名。同種移植を積極的に行っている施設としては決して多い人数とは言えないが、部長を先頭にチームワークよく仕事をこなしているのと、看護婦や薬剤師といった他職種の方々との緊密な連係があって、毎年多くの症例を経験できているものと思う。毎週行われる血液内科のカンファレンスには、看護婦と薬剤師も参加して、治療方針の確認などをおこなっている。

センター内の10床はそれぞれ個室となっているため、家族の面会などは、小児以外比較的自由である。ベッドサイドにソファがあり、家族が付き添われる際などはそちらを利用していただいている。ナースステーションにシャワールームがあり、患者さんは廊下を歩いてシャワーを浴びにやってくる。Day-7でもday0でも、day7でも変わらない。これまで比較的管理の厳しい病院をみてきたので、最初はちょっと不安を感じたが、特に感染症が多い印象はない。清潔を保つのに有用であるとの考えから、看護婦さんも患者さんをシャワーに誘うのに積極的である。こうしてみると、今まで成人の移植後はぐったりしてほとんど動けない印象をもっていたが、移植後まもなくでも自分でちゃんと歩いてシャワーを浴びてゆく人が意外に多いことに気付く。現在の有浦婦長は、耳鼻科にいた経験もあり、口腔ケアに熱心である。口内炎は、下痢、発熱とともに移植後早期の重要な合併症であり、患者の苦痛も大きい。看護スタッフの研究テーマの一つとして、今後どのようなアイデアが出てくるか、期待される場所である。

新築された3号館と、1、2号館をつなぐ、線路沿いに設けられた通路は、パノラマストリートと呼ばれている。名鉄電車や新幹線が走っていくのがみられ、小さな子供には人気のスポットである。日当たりの良い直線が続くため、移植後の患者も鈍った足のリハビリに利用していたりする。面会の人と話をする姿も良く見かける光景だ。夕方はちょっと西日が眩しいが、外出が制限されている血液患者さんにとっては、このような広く見晴らせる場所にいることは、一つの気分転換になるのかもかもしれない。

名鉄栄生駅に接して建てられていることもあり、当院では、名鉄沿線の地域から紹介されてくる患者さんが多い。移植目的で紹介されてくる患者さんも多く、特に非血縁者間移植の場合には、豊橋や岐阜、さらに遠方よりみえる方もある。名古屋には『はなのきの会』という組織があり、こういった患者さんの家族が長期滞在出来るよう『はなのきハウス』を運営している。主治医の先生が一所懸命治療された患者さんを当院へ紹介していただけるのは、われわれの診療を信頼していただいているからだと思う。その信頼を裏切らぬよう、少しでも移植成績を上げるよう、これからも努力を怠らないようにしなければならない。

パノラマストリートで線路をみつめる患者さんの視線の先にあるものは、家族の待つ我が家であろうか。『早く元気になって、家族の元に帰りたい。』それは、患者さんの望みであると同時に、われわれ名鉄病院造血幹細胞移植スタッフ全員の願いでもある。

(名鉄病院血液内科 飯田浩充)

